

1年後と6年後の落差 —東日本大震災をめぐる“語り”—

水谷史男

はじめに

社会学部附属研究所の特別推進プロジェクトとして、2014年度から3年間の計画で「大災害と社会—東日本大震災の社会的影響と対策の課題」が実施された。これは、言うまでもなく2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沿岸を襲った大地震と津波、そしてそれに続く福島第一原発の事故という未曾有の大災害が、被災地および日本社会に与えたさまざまな影響を、多様な角度から研究することをテーマとした。特進プロジェクトは2016年度でいちおうの終了をみたが、参加者のひとりとして、改めて現時点での私なりの総括をここに記しておきたい。

ただ、3・11大災害の問題はあまりに大きく、6年の間にさまざまな学問分野で研究が行なわれ、膨大な報告、論文、記録が残された。そして発生から6年半を経過した今もなお、解決されない多くの問題が残されている一方、一般メディアのみならず被災地においても、3・11への関心の希薄化、「風化」が顕著になってきた。

他方で、2016年4月の熊本地震(M7.3)では死傷者や家屋倒壊の被害が大きく、仮設住宅への避難者が多く出た。地震以外でも2014年8月の広島市土砂災害、同年9月の御嶽山噴火、2015年9月の台風による鬼怒川の堤防決壊水害など、毎年規模の大きな自然災害が続くことから、防災減災へのさまざまな対策、避難情報整備などはそれなりにすすんでいる。

われわれのプロジェクトは、社会学部スタッフを中心に、社会学・社会福祉学の立場から、そのごく一部をとりあげたに過ぎないが、私なりにややフォーカスを引いて、現時点での大災害の社会科学的実証研究とは別に、東日本大震災後の大きな被害に触発された言説、さまざまな形で語られた言葉を、もう一度振り返りながら、今後の課題を考えるうえで重要と思われる点を、2、3あげてみることにする。

震災直後から始まった、東日本大震災をめぐる記録や諸研究には、大きく言って3種類あるといえよう。

- 1) 被災地を中心とする被災の統計的あるいは写真・映像を含む事実の記録。これはジャーナリズムを主体として、被災地での取材による膨大な証言記録、ルポルタージュ、当事者による回想などが蓄積されている。また、政府や自治体、民間団体によっても多くの報告が残された。
- 2) 個別学問分野の研究者、あるいは分野を越えた共同研究プロジェクトが行なった、専門的学術的な研究報告。これには、復興施策作成のための、目的を絞り込んだ研究から、今回の大震災のみならず、広く大災害をめぐる歴史的・比較研究まで、多様な角度からの研究がある。とくに、今後の防災・復

興をめぐる具体的な提案も数多く行なわれている。

- 3) 以上の中にも一部は含まれているが、直接の被災者や行政などに関わる当事者ではなく、一般の国民あるいは海外を含む幅広い一般の読者を想定した著作物がある。それらの「震災・原発論」の多くは、いわゆる文章を書くことを仕事とする「識者」、あるいは映像やアート表現などを仕事とする「表現者」によってつくられたものである。エッセイ、旅行記などの形をとったものもあるが、小説や映画などの創作品はいくつか出てきた。

それらを概観してみると、特に目立つのは、東北の大災害の一次情報が与えたインパクトを契機として、震災直後1年ほどに構想され発表されたものが、量的にも質的にも数多く、なかでも津波災害以上に、福島原発事故に焦点を置いたものが非常に多いことがわかる。そこで、ここでは震災後1年ほどの期間に書かれたものから、いくつかを採りあげ、そこで何がどのように語られたのか、それがその後の6年の経過のなかで、どんな意味をもっていたのかを手短かに考えてみたい。

1 記憶と時間

まず注目したいのは、震災後1年を経過した時点で、日本で影響力のある言論人、あるいは表現者106人によって書かれた文章を集めた『3・11と私』(2012.藤原書店編集部編)である。この書物は藤原書店が発行していた雑誌『環』が、震災1周年特集として掲載したものがもとになっている。執筆者106人は作家、大学人・研究者のほか、政治家や映画監督、歌手など多彩な職業・経歴をもつ人々であるが、いずれも日本社会で広く知られた実績のある人びとである⁽¹⁾。

ここでは、3・11大震災と原発事故をめぐってさまざまな論点、多様な語り口、異なった視点が提示されていて、震災直後の個人的な記憶や感想もあり、歴史的大局的な文明論的考察もある。この106人が選ばれている基準は、一出版社が著作を通じて関わりのある論者を、任意に依頼していることから、現代日本社会の言論界で、さまざまな立場を網羅的にバランスよくとりあげる、というわけではなく、ある種のバイアスをもっている。つまり、この106人には、この後でこの世を去った人もかなり含まれているし、世代的に30代以下の若い世代はほとんどいない。

それを考慮に置いたうえで、それでも震災直後のある時点で、日本の言論に影響のある人びとが何を考えたかをみるには、格好の記録になっていると思う。ただし、これを内容分析のような106人の分布を数量的に拾うような処理は、あまり意味はない。

たとえば、この106人の言説を分類して、何らかのかたちで福島原発事故問題に触れているのが73人(69.2%)、うち原発とその開発に否定的な見解を述べているのが64人(60.8%)という数字を出してみても、そこから解することは、震災発生後1年という時点で、日本の言論に一定の位置を占める“知識人”の過半数が、「反原発」に傾いていたという証言にはなるかもしれない。しかし、これは一種の非常時の昂奮の中の現象ともいえるので、それが地震や津波による災害にではなく、放射能汚染物質をばらまく原発の事故に、心情から敏感に否定的に反応していたという思想的構図に特殊な意味があったのだと思える。

震災後6年半が経過した現在から振り返るとき、この震災直後の反原発・脱原発の「気分」、文明論的終末論的言説などは、一時的放射能へのパニック的恐怖を含め、現在ではメディアが

演出した復興と危機終息宣伝に、いつしか回収されてしまったかに見える。次々再稼働が実現し、福島第一と同形の柏崎刈羽原発まで動かすことになる現実が、この間の変化を象徴している。

ところで、この『3・11と私』に執筆している106人の語りは、大震災1年後という同時点で書かれているという点をのぞけば、論点も文体もそれぞれみな異なっている。いまここであえていくつか整理し、その内容をみてることにする(なお、執筆者の名前は数多く出てくるので敬称を略させていただく)。

*巨視的文明論：まず大震災・原発事故を機に、これまでの日本が進めてきた方向に疑問と批判を提起する「大きな話」。たとえば国際政治学者の武者小路公秀の論。

「ウォーラーステインが「西欧普遍主義の時代の終焉」を確認し、ボリビアの先住民民族大統領モラーレスが「母なる自然の権利」の名において巨大多国籍企業による環境破壊と闘っている今日、すなわちイリイチが生きていたら「伝統的な知」への回帰を主張するであろうこの「近代の超克」の必要な時代に、日本が、鶴見和子さんが高く評価していたそのアニミズムの知恵を世界に普及する「平和への権利」の声となる可能性は、ないものであろうか？」武者小路公秀「優しいけれども怒ると怖い日本列島の自然との共生」p.340.

あるいは、建築史・都市研究の陣内秀信は、「そもそも日本は明治以後、富国強兵に始まり、近代化=西欧化の推進、そしてとりわけ戦後の経済発展をめざす効率と便利さのあくなき追求の道を通り走り、中央集権の体質と企業国家を築き上げたその結果、東京中心、国家中心の一極集中構造をつくりあげ、本来の日本にあったはずの地方の力を弱める結果を生んだ。それぞれの〈地域〉での個性的な生活文化や経済的自

立が失われてきた。もっぱら首都圏への電力供給のためにつくられた福島原発の事故で、地元が大きな犠牲者になった。東北の魚も野菜も、先ずは巨大都市東京のために生産される従属構造が露わになった。過疎、高齢化が進み、地域社会が衰退の兆候を見せていた三陸の小さな町や村が津波で壊滅的な被害にあって、再生への復元力を発揮するのがなかなか難しい状況にある。行政の合理性、効率を追求した平成の大合併も、小さな町や村の自律性を奪う方向に拍車をかけていたに違いない。

しかし、とりわけ大震災後の今、考え方は大きく変わりつつあると思う。〈地域〉の元気を取り戻す必要が強く感じられている。そもそも、グローバル経済の仕組み自体が破綻し始め、危機の状況を示している。世界企業の論理で東北にも多く立地していた工場が被災し、長らく生産がストップした苦い経験もふまえ、それぞれの地方で発想を転換し、地元の資産をフルに活用するような〈地域〉に根を下ろす新しい産業、経済活動を創造することが必要だ。当然、漁業、農業の再生が急務だし、若い世代にも魅力となる新たな時代に見合った付加価値のある第一次産業の在り方の模索が求められる。地産地消の「スローフード運動」のような発想は、特に〈地域〉の自立に繋がるだろう。原発に頼らず、地元で生み出される小規模な自然エネルギー、再生可能エネルギーを多様に開発し、まさにエネルギーの地産地消的な発想へ転換することも重要なテーマとなる。」陣内秀信「〈地域〉主体の発想への転換」⁽²⁾ pp.216-217.

こういった語り方は、従来の大局的歴史的視点を前提に大災害を位置づけるもので、他にも、西川潤(国際経済・開発論)、金森修(科学哲学)、水野和夫(経済学)などかなりある。

*日常性からの文明論：日本あるいはこれま

での近代日本への文明論的反省は、上記の巨視的文明論とも共通するが、もっと日常的あるいは私的な感慨から考えているもの。たとえば、小説家の津島佑子はこう書く。

「原発事故はふだん、なにげなく日常的に使ってきた電気にかかわる物だっただけに、まず電気とはなにか、電気を作るために、なぜ原子力にかくも依存しなければならなかったのか、原子力というものにどのような政治的な意味があるんだろう、と頭を悩ませることになった。かつてアメリカ軍によってふたつも原爆を落とされたこの地震列島に、いつの間にか五十四基もの原発が建てられていたとは、うかつにも気がつかずにいた。なんとという無知！と我ながらあきれ、恥じた。恥じたけれど、どうしてこんなことに？という疑問は消えない。

私の思いは、日本がたどってきた戦後の時間に向かう。さらに明治維新からの流れもたどり直さないわけにはいかなくなる。日本がとりいれた近代文明について考えると、自然な流れで、イギリスの産業革命に至り着く。もとより、ひとりでこうした世界史レベルのことを考える能力を私は持ち合わせていない。それでも考えずにいられなかった。あまりに悲惨なできごとで、私の住む日本が見舞われてしまったのだから。」津島佑子「どうしてこんなことに」pp.94-95.

あるいは江戸文化研究の田中優子は、自然環境との調和を重視するブータンの例に触れ、「グローバリズムの中でそれに呑み込まれることなく取捨選択して自立を目指すその姿勢は、日本では江戸時代までで終わってしまった。しかし再びその姿勢を取り戻さなければ、日本はグローバリズムのみならず核にも呑み込まれる。原発の再稼働を止められるかどうかは、分かれ目になるだろう。

自然は本来人間の都合によって自由に変えることなどできないものである。できるといった

とたんに、その考えが人間自身を減ぼすからだ。一方、人間には容易に変えられるものがある。政策や方針や意志や社会習慣である。変えられないものを変えようと無駄な努力をし、変えられるものは変えなかった。私たちはやり方を間違え、失敗してきたのだ。3・11はそれを教えてくれた。」田中優子「変えられるものを変えよう」pp.310-311.

しかし文明批判という文脈ではなく、伝統と共同体の再確認という方向で、災害をむしろポジティブに意味づけようとする楽観論もある。

「日本人の精神の一番深いところにある共同体の精神と原理が消失していない以上、いずれ被災地は復興するにちがいない。長い平成不況の中を漂い、かといって食うには困るわけでもなく、ただ寡黙に沈殿してきた日本の国民に、国家と共同体の重要性を悟らせたものが東日本大震災であったとすれば、これは天罰ではなく天恵であったと受け止めねばならない。

陛下のお言葉には、私どもが求めねばならない共同体のありようが深々と表出されていた。東日本大震災が日本人に問いかけているものは、懐の深い共同体をもたずして人間が豊かな生をまっとうできない、そういう人間としての本質にかかわる問いではなかったかと思う。」渡辺利夫(拓殖大学総長)「東日本大震災が露わにしたもの——共同体の再生と地域エゴの克服」pp.350-351.

*日記風日常雑記のエッセイ

いきなり文明批評や時代批判にいくのと正反対なのは、3・11から数日間を自分がどのように過ごし、何を感じたかだけを日記風書いているものもある。たとえば英文学者の富山太佳夫や建築史家の鈴木博文、映画監督の河瀬直美の文章は、ごく日常的にその日をどう過ごしたかが書いてある。ただしそれは東京にいた経験

で被災地のものではない。同じ震災体験でも、どこにいたかは決定的に影響する。

この106人のほとんどは当日被災地にいたわけではなく、東京周辺だと交通が止まり帰宅難民になったという体験である。この点、3・11発生を海外で知ったという人も、疫学者三砂ちづる(プノンペン)、アフリカ研究の勝俣誠(大西洋上)、政治学の宇野重規(アメリカ)、科学史家中山茂(メルボルン)、ジャーナリストの武田徹(イスタンブール)などかなりいて、その時の感想を書いている。

震災時は被災地にはいなかったが、まもなく現地に行って被害の状況を自分の眼で見たのは、農業詩人星寛治、ノンフィクション作家の稲泉連、画家の木下晋など数人いる。

三陸被災地で地震や津波を生で見ている場合、福島県浜通りで目に見えない放射能から逃げた場合、そうした体験のリアルに比べて、東京で通信が絶え帰宅できなかった経験とはかなり違うし、西日本では大震災は、あくまでニュースで知る事件でしかない。まして外国にいた時に3・11を知った場合は、外国人がメディアを通じて知りえた情報と違わないであろう。

106人の中には、歴史学の王柯、詩人の高銀(コウン)など外国籍の人も含まれるが、どうしても災害のリアリティは希薄になる。対照的に、記者として震災前の石巻で三年暮らした高成田享が見ている景色は、具体的な一人ひとりの漁師であり流された街である。

「震災から一年たって、何が欠けているかの空白域も見えてきたような気がする。下手でもいいから、現場と復興策を結ぶ「通訳」になろうと思う。メロウドに早く本当の春の訪れを告げさせたい」高成田享「メロウドと復興」pp.148-149. メロウドは三陸の春告魚。

*記憶の呼び出し・呼び返し

ただ、密教学の僧侶頼富本宏や中国文学の一海知義のように、別の体験を想起する人もいる。

「一七年前の阪神・淡路大震災のとき、私はその渦中にいた。悪夢のような二秒間の激震のあと、建物半壊にもかかわらず、家族等の無事が確認された後、無意識のうちに駆けつけたのは近所の市立体育館で、見守る人もない中、検死を待つ遺体のそれぞれに心から鎮魂と供養の読経を捧げた。

私の先ず出来ること、それは一瞬のうちに旅立った御魂に供養の祈りを捧げることだった。今回、直接に東北へ赴く機会はなく、慚愧の念を抱きつつ、義援金の微力な協力しかできないが、死者にも、そして残された生者にも共苦・共存を祈ることにせめてもの誠を尽したい。」頼富本宏「ただ祈るのみ」p.288

社会経済学者の松原隆一郎も、被災家族であった過去を振り返っている。

「東日本大震災について、ごく個人的な感想を述べたい。それは一つには、一九九五年の阪神淡路大震災で実家が被災した体験を思い起こさせるものであった。あの震災によって妹と母が亡くなり、残った父も三年前に他界して実家を売却したのが一昨年。家族の人的かつ物的なつながりを震災後十五年にしていよいよ喪った半年後に、東日本大震災が東北を襲ったのだ。東北地方は、仙台を発祥の地とする武道(「空道」)を生涯の趣味とする私にとって、その仲間が暮らす土地であり、七ヶ浜の知人は家だけを流されて現在二重ローンとなっており、荒浜の知人は家と愛妻を奪われた。(中略)

阪神淡路大震災と今回の大震災とで決定的に異なるのは、前者の被害が直下型の震災によるものだったのに対し、後者が主に津波被害によるものだった点にある。直下型だと家が全壊しても、火災が発生しない限り家族の思い出の品や街並みの一部は残る。そうした「記憶」が無

残にも失われたのが東日本大震災だった。荒浜の知人は、愛妻の写真のほぼすべてを失ってしまった。

原発からの避難者は、より複雑な心境だろう。なぜとって、故郷は見た目においては美しいままだからだ。高齢者が、とりわけ福島県で原発災害で立ち退きしている地域に戻りたがるのに対し、なぜ私の景観保存論を批判した人々は、「センチメンタリズムだ」等と批判しないのだろうか。景観は住民の記憶や人格を構成する不可欠の要因であり、失なわれることに抵抗するのは当然のことである」松原隆一郎「公共財としての景観や人のつながり」p.385-387.

このほか世代的にもっと上の戦争経験者には、戦災あるいは関東大震災まで想起した人もいる。そのひとり、大正10年生まれのエコノミストの角山榮はこう書いている。

「最後にひと言。私は経済史家として歴史は現場主義でなければならぬと、常に自分に言いかけ学生にも機会あるたびに申してきた。このたびの東日本大震災もすでに一年経過したが、その間当然現場へ行っていなければならないはずである。しかし九十歳を越えた高齢者になると、心が動いても足腰や身体が動かない。被害者の皆さんには誠に申し訳ないが、お許し願いたい。にもかかわらず敢えて執筆したのは、このたびの大災害は人類の歴史のなかで特別な意味をもっていると主張したかったためである。」角山榮「人類史の大転換を促す大震災」p.254.

ちなみに角山氏は2014年10月逝去している。

*エコノミストと政治による復興案

以上の論が、災害の実態や復興計画がまだ模索中か、よく見えていなかった時期に書かれた、やや観念的主観的な言説が多いのに対し、きわめて具体的または実務的な考察を書いているの

がエコノミスト、あるいは政治家の職にあった人たちである。代表的ともいえるのが、東京財団上席研究員の原田泰である。

「事態が落ち着くと共に、東日本の復興のために巨額の公共事業が必要だという議論が盛んになっていた。私はこのような議論にエコノミストとして違和感を抱いた。東日本大震災で毀損された物的資産は一六・九兆円だと内閣府が推計した。この金額から出発して、一九兆円から二三兆円の復興予算が必要だという議論になっていったのだが、そもそも一六・九兆円も壊れているはずがない。

被害の大きかった福島、宮城、岩手でも、内陸部に入れば被害は限られている。この三県の人口は五七一万人であるが、津波による浸水地域の人口は五一万人である(総務省統計局調査)。この中には、床下浸水地域の人口も含まれている。震災で避難された方は、ピークで四〇万人である(警察庁緊急災害警備本部)。すると、自宅に住めないような深刻な被害に遭われた方はせいぜい五〇万人程度だろう。

一方、日本全体の工場や住宅、道路や港などの物的資産(建設物だけで土地は含まない)の額は一二三七兆円である(内閣府「国民経済計算」民間・公的別の資産・負債残高、二〇〇九年末)。日本の人口は一億二八〇六万人なので、一人当たり九六六万円の資産をもっていることになる。

東北三県で破壊された物的資産は、九六六万円に五〇万人を掛けた四・八兆円程度である。これを少し多めにして六兆円としよう。日本全体の物的資産のうち、民間の資産と公共の資産の比は二対一なので、東北でもこの比は同じとすると、破壊された民間資産は四兆円、公的資産は二兆円ということになる。

このすべてを政府の負担で復旧したとしても六兆円ですむ。一九兆円から二三兆円と言われ

る復興費は要らないはずだ。では、政府は、何に使うとしているのか。そのお金の多くは、人々を助けるものではなくて、被災者とは関係のない事業に使うのである。例えば、エコタウンである。これは割高な自然エネルギーを用いる街である。こんな街を造らなくても、漁船や漁具や水産加工場を再建する資金を援助すれば、人々は仕事に就け、自分で日々の糧を生み出していくことができる。

にもかかわらず、なぜ震災復興に巨額の効果のないお金が使われるのだろうか。それは政治が、人々を政治に依存させようとしているからである。政府の援助によって自らの漁業を再建した人々は自立し、政治には依存しない。それでは政治はつまらないのである。エコタウンのような割高なエネルギーを用いる町を作れば、人々はいつまでも補助金を求める。それは政治の力を肥大化させる。高台移転のような巨大な公共事業を行えば、その工事には何年もかかる。人々は何年も政治に依存することになる。

人々を政治に依存させれば、政府支出が増大し、いくら増税しても、財政再建などできるはずはない。人々が自立すれば、政府支出は減少し、増税をしなくても税収が上がる。震災のような事態では、政治が人々を助けるのは当然である。しかし、震災という異常事態だからこそ、人々の自立を助けなければ、日本という国が危うくなる」原田泰「誤った震災復興策を止めさせなければならない」pp.369-370.

この人の、復興対策を政府と政治に依存する旧来の体質を強く批判する新自由主義的立場をどう考えるかはともかく、事態の把握を人口と物的資産の計算から引き出すやり方は、エコノミストあるいは官僚的合理性ともいえる。これは『3・11と私』には登場しない次の論説でもっと徹底されている。

「地震と津波が起きたのは2011年3月11日午

後のことだったが、同年第1四半期(1～3月期)のGDP成長率は年率換算マイナス3.7%であることが後に発表されている。今回の大災害の影響が出たのは四半期(3カ月)のうちのわずか3週間だったのにもかかわらず、このような大幅なマイナス成長になったことは、多くの専門家にとっても予想外のことだった。(中略)

今回の大震災は、地震・津波といった自然災害に加え、原子力発電所からの放射能漏れによる農作物などへの被害や、電力不足の顕在化といった大きな派生的被害を生み出している。したがって、当面の日本経済にかなりの程度のダメージを与えたことは否定できない。また、電力不足を懸念して企業の海外立地が促進されれば、国内産業の空洞化が促進され、日本経済の将来の成長力を大きく削ぐ可能性もある。こうした中長期のリスク要因についても検討しなければならぬだろう。

その一方で、復興のための公共事業、設備投資などの特別な支出の拡大が期待される。いわゆる「復興特需」である。」⁽³⁾竹中平蔵「大震災と日本経済」pp. 151-152.

経済学者竹中平蔵も、大震災を憂えていち早く発言しているのだが、その関心は経済指標、端的にはGDPの数値に絞られる。

「当初、大震災により日本経済の供給力が低下し、他方で震災特需による需要拡大を期待する見方があったが、現実には必ずしもそのような動きは生じなかった。供給の低下はみられたものの、民間企業とりわけ現業部門の尽力でサプライチェーンは予想以上に大きなものとなった。このため、GDPの落ち込みは一般の想定よりかなり大きなものとなった。ただし、主要な経済指標をみれば、震災直後の混乱は、おおむね4か月程度で収束の兆しが見えるようになった。(中略)

復興策そのものの作成に当たって、政府はサ

ンク・コスト⁽⁴⁾がゼロになるという特需状況を十分認識できなかったため、既得権益の見直しに踏み込むような大胆なビジョンの提示ができていない。さらに、財政状況が悪いこと(財政破綻確率が高いという情報)が、増税を先行させるような状況を生み出している。しかし、不況下の増税というマクロ経済運営の原理原則に反した政策は、日本経済に打撃を与える可能性がある。

大震災直後の混乱した状況が比較的短期で収束した一方、中長期的な経済リスクが高まった可能性がある。(中略)

ただし、復興のための大型補正予算が実行されれば、大規模な復興需要が見込まれる。2011年の終盤から12年にかけて、経済そのものは回復の軌道を歩むと考えられる。しかし、こうした特需はあくまで一時的なものであり、1~2年後には終息を迎える。改革政策が先送りされれば、その時点で改めて経済の閉塞感が高まる懸念される。

一方、大震災からの復興のなかで、ゼロベースから競争力ある農業を構築し、最先端のエコタウンを建設するなど、新たな成長モデルを実践するチャンスは存在している。政治的不安定を克服し、強力な指導力をもつ政権の下で政策課題を解決する姿勢が求められる。

日本という国はこれまで「民間部門は強く、政府部門は弱い」、また「現場は強く、中枢管理機能は弱い」と指摘されてきた。今回の大震災という極限状況で、「強い民間・弱い政府」という姿がさらに顕著に現れている。こうした歪みを克服することが、日本経済再建のために求められている。]竹中平蔵「大震災と日本経済」pp. 185-187.

文明論的考察がどちらかというと、震災と原発について悲観的情緒的な色合いが強いのに対して、このような議論は、被災地や被災者の現

実にはほとんど関心がない。それよりも大事なものは日本経済への悪影響であり、経済成長率の低下である。起きてしまったことに対処するには、冷静にリスク管理とコストの計算をして、民間企業の国際競争力を損なわないような施策を、素早くとることが優先であると論じる。

竹中は政府がなるべく早く復興の方向性と財政的な指針を示すことの重要性を説いているが、中央政府の中にあつて震災対応を迫られた元総務相の片山善博も、ミッションの重要性を強調しながら、それが実現できなかったと述べている。

「この財源について国がどれほど提供できるのかをあらかじめ示しておくのが復興予算であり、それはできるだけ早く決めておく必要がある。自治体はそれを見て「腹づもり」ができ、例えば被災者に対し自信を持って「高台移転」を勧め、被災した町の「ゾーニング」の手続きにもとりかかれるからだ。

「腹づもり」ができなければ、大事なことに手がつけられないままであるしかない。果たして、政府が本格的な復興予算を編成したのは、復興増税の方針が決まった十一月で、被災からすでに八カ月も経過していた。自治体の復興作業もそれまで「おあずけ」を食らわされていたことになる。

なにゆえに本格補正予算はかくも遅れたのか。筆者は総務大臣として閣議などの場でしばしば補正予算を早期に編成するよう促した。しかし、野田財務大臣は「財源がないのに復興予算を組むのは無責任だ」との主張を繰り返すばかり。そこで菅総理にもその旨訴えたが、苦渋に満ちた表情をするだけで、事態は変わらなかった。

結局、残念ながら政府の方針は「増税なくして、復興なし」であった。被災者の皆さんの不安を安心に、絶望を希望に換えるには、一日も

早く予算を組まなければならないはずなのに、ミッションを弁えていなかったのである。今日被災地の復興が思うように進んでいない実情を聞くにつけ、閣僚として力が及ばなかったことに忸怩たる思いを禁じ得ないでいる。」片山善博「震災復興とそのミッション」pp.151-152.

『3・11と私』には、片山の他にも前岩手県知事の増田寛也、静岡県知事の川勝平太も寄稿している。政治家として行政の実際にかかわった人には、たんなる評論ではなく過去の政治行動への責任が問われるが、閣僚ですら結局は無力であったかのような発言に読める。

* 専門家からの渋い発言

震災発生後、多くの人びとが一番聞きたいと思ったのは、原発事故原因とその対処への東電や政府当局の責任ある発言であるとともに、「原子力ムラ」の内輪の話ではなく各種専門家の正確で冷静な説明だったと思う。それが乏しく信頼できないと思ったからこそ、われわれは大きな不安を感じた。この点で、『3・11と私』にはいく人か科学者も発言しているのだが、実は自分も全体像が情報不足でよくわからない、みたいなことになってしまう。

その中で、科学史家村上陽一郎は、やや違った角度を提示している。これまでも中越沖地震の際に、新幹線の大地震時の危機回避が成功していたことなどをあげてこう述べる。

「こうした事例は、技術開発に当たって、常に新しい問題が発生すると、その経験を生かしながら、問題の解決を図るといふ、地道な、しかし技術の世界では当たり前の努力が、積み重ねられてきたことを示している。もちろん、リスク対策に「安心」はあり得ない。安心した瞬間に、それは「油断」に早変わりするからである。常に〈safer〉(より安全)を目指して進むことこそが、技術を支える基礎である。

そして敢えて書けば、原子力発電所でも、地震の揺れに対するリスク対策は、それなりの実績を上げてきている。それは、問題の福島第一原子力発電所でさえ(他のサイトはもちろん)、今回の、歴史上稀有の規模の大震災に際しても、とりあえずの「スクラム」(原子炉の自動停止)は達成されていると思われることから、言えるはずである。さらに今回の事故の主因が、補助電源の完全喪失という事態であったことから、各サイトでは、そうした事態への対応策も進めていると理解している。

要は、これまでに積み重ねてきた技術開発が、今回の災害で一切無になったわけではないのである。したがって、一つの提案は、補助電源の問題のみならず、老朽化の検証、立地条件の再検討(今新しい知見に基づいて、柏崎地域の地盤構造の再検討も行われていると聞く)など、震災後の課題となっている点に、確かな対応が講じられているサイトから、順次再稼働させる方向で進んではどうか、ということである。もちろん全体として、今後原子力発電の依存度をより高めるといふ政策は、あり得ないであろう、という前提は共有した上でのことであるが。

ほとんど稼働しているサイトがない今でも、電力事情は逼迫していないではないか、という見解がしばしば語られる。しかし、火力に頼り切ること(自然エネルギーの大規模開発が今に間に合わないことは明らかである)には、それでいくつかの深刻な危機があることも、理解しなければならない。その危険は、単に技術上の問題だけでなく、政治的、経済的、外交的な問題も含み、絡んでいるのである。

もう一つ考えておかなければならないのは、今回の事態で、原子力発電所の弱点が、見事に露わになった点である。つまり、テロリズムの立場からすれば、どうすれば原子力発電所を攻撃できるか、という点で、格好のデータを得た

からである。その意味では、再稼働に当たっては、単に技術上の信頼性だけではなく、セキュリティ上の信頼性も併せ検討する必要があることを銘記すべきであろう。」村上陽一郎「原子力災害を巡って」pp.216-217.

世論が東電や政府のこれまでの原発政策を批判し、推進派は「御用学者」として糾弾されたこの時期に、村上が再稼働も容認する意見を述べたのは、おやと思う人もいたと思う。しかし6年後の現在進行している事態は、ある意味で村上の言っていたような、誠実な科学者が難しい課題に挑戦し、原発の終息に努力しているという側面があるのかもしれない。しかし、もっと別の要素を指摘する人もいた。

「国連安保理常任理事国五カ国(米、英、露、中、仏)以外は核兵器を持つなどというNPTを、バツサリ、不平等条約と切り捨てたインド。こういう姿勢は、ガンディー主義、徹底した「被抑圧者の不服従」による独立達成、その後の非同盟中立主義の主導と、筋金入りだ。インドはモラルの王様であり、世界最大の民主主義。「違法」に核兵器を保有しても、米がインドに「ならず者国家」の烙印を押す口実がない。そればかりか、せっせと「核の平和利用」の支援でインドに擦り寄り、核統制レジームの体裁を繕ってきた。

一方のパキスタン。一九七八年、隣国アフガニスタンへソ連が侵攻し米ソの戦場になると、前哨基地としてパキスタンを懐柔。軍政が続き、民主主義からほど遠い、イスラム原理主義が蔓延る破綻国家であるが、核保有を黙認。ソ連崩壊後、アフガニスタンに親パ政権を置くことが国是のパキスタンは、タリバン政権の樹立を支援する。そして、タリバン政権に囲われていたアルカイダが9・11を起こすと、アフガニスタンは米の対テロ戦の標的に。米はタリバン政権を壊滅することに成功はしたが、それら残党と

の戦争は、パキスタン国境を主戦場に、現在でも出口がない。アフガン側から戦う米は、パキスタン軍の協力を得て、敵を挟み撃ちにしないと、戦略自体が成り立たない。敵を撃滅するにも、その敵をつくった張本人の協力なしでは戦えないというジレンマ。「核保有破綻国家」への米の依存は続く。

一方で、イスラム原理主義が蔓延る軍が直接的に核を管理するパキスタンにおいて、内政が更に破綻すれば、核がテロ組織に拡散するという、米にとって最大の悪夢を想定しなくてはならず、その後ろにイラン、北朝鮮という本命「ならず者国家」の影がちらつく。これが、不平等で、米の目先の国益に左右されるが、人類が持ちうる、唯一の、核を統制するレジームの実体である。

地球上の核を、全て、同時に封印できればいい。あたりまえだ。しかし、全人類が「反核レジーム」を共有する状況は、今のところ夢に近しい。なぜなら、我々は常に、一部の「ならず者」の存在を恐れるからだ。たとえ、そいつらが取るに足らない小さな存在でも、我々が放棄した核を手中にすれば、この安全保障の現実を基盤に、原子力開発があるのだ。この安全保障上の、決別したくても、決別できない恐怖を深層心理にする国家社会は、反原発思想を妄信できない。FUKUSHIMAが何回起ころうと、だ。

「ならず者」への恐怖の源泉となる人間が持つ「排他性」は、国家をして「抑止力」の強化に邁進させる。その最先端が、P5、そしてインドが保有する原子力潜水艦だ。原子炉事故に加えて、沈没、座礁、衝突(原潜同士のものもある)。事故後、相当数、沈んだまま放置されている。やっかいなのは、原潜は最大級の軍事機密のため、事故の全貌がほとんど表面に出ないことだ。しかし、「泳ぐ原発」への恐怖が、我々が排他する「ならず者」への恐怖を、凌駕する

気配は、今のところ、ない。

この「排他性」の実体を出発点にしないと、FUKUSHIMA後、勢いを得たかに見える日本の反原発運動に、実効性は生まれない。いや、最もタチが悪いのは、運動への妄信である。そして、その「妄信」が生む、新たな「排他性」である。

FUKUSHIMA後、放射能という新たな恐怖は、「平和を追求してきた」日本人社会に、新たなレジームをつくりつつある。単純に、反原発か否かが、踏み絵になっている。それで人間の全人格が決まるような。かつて九条護憲か否かがそうであったように。

ネット上で「御用学者狩り」も始まっている。発言のあら探し。そして、「原発推進派」のレッテル張り。バカらしい。

放射能への恐怖から、沖縄に避難する「母性」に罪はない。自分の身を犠牲にしてまで子を護る「母性」は、非のうちどころのない人間の最強の良識である。しかし、「排他性」は、この「母性」をも利用する。いや、「母性」が集団化し、熱狂すると、「排他性」を先導さえするだろう。「ならず者」が原発を狙う近未来が現実味をもって夢想された時、日本の「母性」は、日本の「抑止力」の強化に熱狂するだろう。

放射能への恐怖を源泉とする「排他性」は、「ならず者」への「排他性」と同質のものである。このことに気づいて欲しい。

反原発運動が「ファシズム」にならないうちに。」伊勢崎賢治「反原発運動が「ファシズム」にならないうちに」pp.104-107.

国際紛争・武装解除の専門家伊勢崎賢治がここに書いていることは、村上以上に当時の言論状況のなかでは異質に感じられた。しかし、それから6年。あのとき「核の脅威」と「原発事故」が密接にかかわってくる事態になろうなど

と、多くの国民は思っていただろうか。世論は移ろいやすく、たった6年で被災地の風景と同じように、過去の記憶は薄れて、まったく別の景色が現れている。

『3・11と私』の執筆者に社会学者はいないが、東日本大震災研究は多くの社会学者が取り組んで、すでに多様な業績が公表されていることはいうまでもない。だが、比較的早い時期に包括的な報告と議論をまとめたものとして、田中重好・船橋晴敏・正村俊之の編著になる『東日本大震災と社会学』⁽⁵⁾をあげるのは、異論のないところであろう。

2 消滅した町と記憶—陸前高田市今泉地区

前節で東日本大震災発生から1年経った時点で書かれた『3・11と私』を読んできた。以下では、もう少し時間が経過した時点の、具体的なひとつの被災地に目を転じたいと思う。それは岩手県陸前高田市の今泉地区である。三陸沿岸の多くの町と同様、3・11の津波によって目の前を流れる気仙川に河口から押し寄せた津波によって、この地区は壊滅的な被害を受け消滅した。

ここをとりあげる理由は、筆者が何度か訪れるうちに偶然ともいえる、ふたつの手がかりを得たからである。

ひとつは、ここに生まれ育って東京に出て写真家となった畠山直哉という人の『気仙川』(2012)と『陸前高田2011-2014』(2015)という2冊の写真集である。もうひとつは、高橋恒夫・(株)ディーワークから出ている『よみがえる陸前高田市の今泉集落—流出前の調査と復興活動の資料集—』(2015)である。

今泉はこの一帯が1591年以来、仙台藩領であった江戸時代、山を背にして前面を流れる気仙川との間に代官所が置かれた土地で、領内の支配を担当する藩役人や足軽屋敷、「大肝煎」(おおきもいり：大肝入とも書く)と呼ばれる大

庄屋の屋敷や寺院が、街道沿いに集まって集落を形成していた。いわば気仙郡の行政の中心であった。

また河川交通と、浜街道(仙台・釜石間)や今泉街道(一関・今泉間)の交差点に当たる交通の要所でもあった。今泉には代々大肝煎を世襲した吉田家の屋敷が残っていたほか、藩政期からほとんど変化のない町割りと、気仙大工が築いた明治期以来の古い商家が並ぶ重厚な町並みがあった。

明治以降は気仙町として存続し、1933(昭和8)年、川を越えた平野部に鉄道駅ができた高田町と1954(昭和29)年に合併して、陸前高田市気仙町になった。毎年8月には、山車同士がぶつかり合う「けんか七夕祭り」が開催され、高台には茶畑が広がり、気仙茶と呼ばれる茶が製造されていた。それが、3・11の津波災害によりほぼ全ての家屋が全壊状態となった。

ここの出身の写真家・畠山直哉は、東京在住だが、津波におそわれる前と後のふるさとの写真80点と、震災直後を記したエッセイで構成された追真のドキュメント『気仙川』を刊行し、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。

また高橋恒夫・(株)ディーワーク『よみがえる陸前高田市の今泉集落一流出前の調査と復興活動の資料集一』は、かつて存在した今泉の歴史的遺構や遺跡を、今回の津波で流される以前に詳細に調査していたために、大肝煎屋敷であった吉田家住宅をはじめ歴史文化資料を通じて、失われた気仙町の記録を知ることができる。

さらに畠山は、『気仙川』の続編として、震災後4年のすべてが消えた今泉を、再び写真集『陸前高田2011-2014』として刊行し、その末尾に長いエッセイを書いた。筆者はかつてあった今泉の姿を知らないが、これらを読むことでそこにあった人々の生活と記憶を、垣間見ること



ができる。そのエッセイからいくつか、印象深い記述を引用する。

畠山直哉「陸前高田 バイオグラフィカル・ランドスケープ」⁽⁶⁾より。

「昔、ある日本の詩人が「ふるさととは遠きにありて思うもの」と詠ったけれど、たしかに故郷というものは、我が身を遠き処に置くことによってしか現れない。その意味ではとても個人的で、とても想像的な場所ともいえるだろう。

「私も気仙町の生まれで。ほら中井の……」と、東京都写真美術館のロビーで老齢の女性から声をかけられたときの気持ちを、どう表せばよいのだろうか。彼女の願望には確かに、あの地方によくみられる、ある種の無駄のなさというようなものがあって、それが幼い頃に近所で見かけていた婆ちゃんたちの面影を彷彿させるのだが、半世紀以上を大都会で過ごしたという事実の蓄積が、そのたたずまいに微妙な偏差を与えている。ブラジルのサンパウロで日系の移民一世に出会ったときと似たような感じ、とでも言えばいいだろうか。彼女はたぶん、気仙中学校を卒業してすぐに集団就職で上京し、足立区あたりで懸命に働き、日本の高度経済成長を支えていた、いわゆる「金の卵」のうちの一人名のだろう。(あの時代には日本全国で、毎年百万人もの人々が、地方から都会に出て行ったという。)半年以上出会うことのなかった近所の人間同士が、遠い東京で、こうして顔を見合わせている。お互いの目の奥には、在りし日の気仙町の町並みが広がっている。」

「故郷の喪失」という言葉はふつう、そこを出て大きな都会のような場所でまったく違う世界を生きている人が、遠くにある親しい人々や風景を懐かしみながら、しかしもうそこには帰れないというイメージから出てくる。しかし故郷に帰れば、そこには子どもの頃と同じ暮らしと風景があるとは限らない。

「墓参りの後、寺からマイクロバスでプレハブ造りの料理屋に移動して、そこでお互いに紹介が始まってから、この中で高田にいま暮らしている者は、けっきょくたったの二人しかいないのだ、ということがわかった。しかもその二人は、僕がすでに顔を知っているあの寡婦たちで、あとの人々は僕のように、ここで生まれてはいるが、長く東京や埼玉や仙台に暮らす者と、その家族たちなのであった。

大津波で、名家の当主は亡くなり、歴史のある大店も、広い畳部屋がいくつもある家も、蔵も消えた。子供の頃から馴染んでいた町並みもすっかり消えてしまい、山寺に先祖代々の墓が残っているだけの、このような土地を故郷とする僕らとは、いったい何者なのだろうか？僕の故郷はたしかにこの陸前高田で、それは今でもこうして存在するのだが、同時にあの陸前高田は、懐かしい人々と共に、地上から永遠に失われてしまった。「あなたの故郷はどんなところですか？」と問われて答えに窮する人の種類は、大津波の後で、確実にもうひとつ増えた。」

家も人も故郷そのものが突然消滅してしまった、という歴然たる事実を前にして、まずは立ちすくむしかない。次に、かつてあった場所の記憶を徐々に回想する。

「僕が生まれた頃には、気仙川にはもう土手はあったけれど、それは「一面に草の生えた土の土手で、川開きの花火大会の時には、大人たちが総出でその土の斜面に杭を打ち、丸竹と板を用いて即席の棧敷をずらりとこしらえ、暗くなるのを待ったものだった。あの頃(昭和三十年代)の今泉は賑やかで、人が本当にいっぱいいたし、子供もいっぱいいたし、街道に面した家々は、ほとんどながしかの商いをしていて、米屋や魚屋や雑貨屋なども数件おきに並んでいるような有様で、もちろん医院も複数あったし歯医者もいたし、農協は銀行の代わりをしてい

たし(その建物は以前「気仙銀行」が使っており、祖父はそこで働いていたのだと聞かされた)、となりの今泉公会堂でたまには演芸会も映画もあったし、小さな町内を歩いて回るだけで、すべて用が事足りていたことが、今ではとても信じられない。」

現在見ている世界は何もない廃墟で、死んだ人も消えた家ももう戻らない。できるのは過去の記憶を反芻することだけだ。

「大津波の後で、高台から建物の消えた町を眺めたとき、僕たちが暮らしていた町の、その地面すべてが、河面とあまり高さが変わらないという事実がありありと見てとれ、ほんとうにやりきれなかった。母が近所の人々と避難したはずの仲町公民館は、昔僕が通った保育所のあった場所で、街道から坂を上った山すそにあったため、てっきり高いところだと錯覚していたが、町の建物がすべて無くなってから眺めたら、僕の家が建っていた土手と、けっきょく同じ目の高さにあるということが確かめられた。街道のあったところの地図が低かっただけなのだった。

高田町で、避難場所に指定されていたものに、市民会館と市民体育館があった。二つの建つ地面はせいぜい海拔二、三メートルといったところだが、大きな建物のため、たとえ津波がそばまで来ても、上の階に行けば安全だろうと信じられていた。指定されているからと、わざわざ気仙町からそこに避難した人もいたのだが、大津波は建物を覆うほどの高さで襲ってきたし、二つとも屋上のある建物ではなかったから、ほとんどの人が中に閉じ込められた状態で溺死してしまった。中には溺れながら天井の梁にしがみついた人もいたというが、いったん津波が引くと十メートル以上の中空におり、そこで力尽きて落下し、絶命したのだと聞いている。発表によると、市民会館では七十人、市民体育館で

は八十人の市民が亡くなった。建物の位置からは、歩いて数分で山道への入り口で、そっちに逃げれば無事だったのにと悔やむ声や、わざわざ低地の建物を津波時の避難所に指定していた当局への不満の声が、未だに絶えない。けれど、大津波が町を襲った日の以前に、このような極端に怖ろしい出来事を想像することが、どんな人間に可能だっただろうか？たとえもし、それが誰かに可能だったとしても、その想像を口にしたなら、周りの人々はどんな顔をしたのだろうか？」

過去への回想の次は、さらに時間をさかのぼりつつ、視野を広げて時代の変化に及ぶ。

「僕が中学の頃から、町はだんだん静かになっていったと思う。国の経済成長は続いていたが、農業や漁業や林業といった、町の主たる産業は「第一次」の産業と呼ばれ、第二次、第三次の分野こそが現在および今後の経済の主流であると喧伝されていた。市の人口は70年代初頭には三万人を切り、そのままじりじりと減り続け、近所の米屋や魚屋や医院もいつの間にか少しづつ消えていった。その一方で、テレビなどのマスメディアの威力によって、人々の考え方や価値観は、都会の人たちとあまり差がなくなっていった。それにつれて方言も薄まり、それまでのしきたりや行事、たとえば小正月を長押の飾り付けで祝ったり、近所の主婦が集まって味噌を仕込んだり、といったことも簡略化されたり省略されたりしていった。そんな時代の変化と切り離せないのが「自動車」の普及ではなかったか、と僕は思う。」

自動車に象徴される生活の大きな変化が、じわじわと故郷も変えていたことを今になって実感する。それは表向き生活の向上、地方の発展といわれていたが、実は故郷は確実な衰退に向かっていた。そして3・11。

「大津波の後、海を見るのが嫌になった。怖

いとかいうより、はっきりと嫌いになった。あのゆらゆらと揺れる広い水面など、見たくもないので、用事で車を運転する時には、海沿いの道ではなく、山側の道をわざと選んで走るようにした。

これは好き嫌いの問題ではないだろうが、住処を失ってしまった市民の多くも、まるで白地図のようになってしまった平野を眺めながら、これから元の低い土地に戻って再び暮らすことなど決してできない、と思ったはずだ。どうせもう何もかも無くしたのだから、前の場所は諦め、もっと安心なところで、すべてを新しく始めることになるだろう、と思ったはずだ。だが、その新しい暮らしを、実際どこでどうやって始めればよいというのか?」

かろうじて生き残った人々には、次にどうやって自分の未来を再出発できるか、まだ構想する余裕がないが、復興の堤防や高台造成の土木工事は大規模な予算をつぎこまれて、山の形までどんどん変わっていく。

「大津波から四年近くが経って、陸前高田はいま、完全に土木工事現場の様相を呈している。すでに賃貸用の中層集合住宅のいくつかは完成し、高台の造成も進んでいる。もと町のあった低地には、それまでも土の仮置き場があちこちにあり、巨大な台形の丘が生まれては消え、を繰り返していたのだが、最近になって、山裾の平地を海拔十二メートルまで嵩上げするための盛り土工事が本格的に始まった。工事の前に、地中に埋設してある水道管などのインフラはすべて取り除く必要があるらしく、市内の道路には通行止めの柵が立てられ、地面はすべて掘りかえされ、街道も埋められたり移されたりして、もと暮らしていた町の様子を思い出すための縁は、完全に消滅しつつある。

今泉では、気仙中学校の校歌(「愛宕の山の裾近く/鳴瀬の流れ太平洋/浦松原を庭として/建

ちたる気仙中学校」)にも歌われた愛宕山が、住民の高台移転候補地にまず選ばれ、海拔百二十メートルほどあった山は、五十メートルまで削られることになった。等高線に沿って山を水平に切れば、そこには自ずと平地が生まれる。

昭和八年、そして明治二十九年にも、あるいはそれ以前にも、三陸地方は大津波に襲われ、その度に多くの死者が出、いくつかの集落が壊滅しているという。そのような津波の後、人々は以前よりもっと高いところに住むように努めたり、土手や防潮堤を造ることを試みたりしたかもしれない。しかし、平地の高さそのものを大規模に改変するなどという試みは、今まで誰もおこなったことがないだろうし、誰もおこなえなかっただろう。これは昔の人から見たら、信じられないような規模の大事業であり、これを可能にしているのはまさしく、現代日本の国力、および技術力なのである。

今泉の低地部分の嵩上げ作業も、河口部から上流に向かって少しずつ始まっており、もうすぐ僕の生まれ育った辺りにも土が盛られる日が来るだろう。いまは津波の前に姉が新築した家の土台がまだ残っているが、それもやがて崩され、見るができなくなる。(土地は僕の名義だったので、高台か嵩上げ地かのどちらかに、換地の希望を出すようにと市の方から言われたが、高台の方は数百億の国費を投じて造成されているだけに、造成終了後二年以内には家を建てて欲しいとの要望が都市再生機構側から出ており、情けなくも家を建てる自信のあまり僕としては、とりあえず「嵩上げ地」の方にマルをするしかなかった。)

住宅をどうするか、仕事をどうするか、復興のスケジュールは容赦なく進んでいく。しかし、ひとりひとりの生活はそうのように整合的秩序の上うまく乗るには、まだ心がついて行かない。

「家の前の土手の、コンクリートの階段に腰

を下ろし、気仙川の水面や遠くの氷上山を眺めていると、子供の頃からずっとこうやってきたのだという安息に満たされるが、その気分を自分ですぐに否定しなければならないことが、いまではつらい。後ろを振り返れば、そこにあるはずの懐かしい家や樹木や町並みは消えており、ただ雑草の生える地面が遠くまで続いている。その空っぽな光景が事実なのだ、無理矢理にでも認めようとすれば、この自分が以前と同じ自分なのかどうかは、急に疑わしいものと思えてくる。

いったい時間や歴史とはなんのことだろうか？時間や歴史とは、時計の運針や年表のようにしてあるものだろうか？いや、そんなことはあるまい。だいいち自分が大津波の直後に過ごしていた重たい時間を、普段の時間経験と同じものとして理解することが、僕には全然できない。あのとき時間は、時計やカレンダーなどが表しているものとは、まったく違う何かだった。あのときの時間とは、自分の心と外界が絡まりながら動いている、その動きの事実としか呼べないようなものであり、他とは比較できないようなその事実の特別さに較べ、時計の針はただ、それに冷たい尺度を与えていただけではなかったろうか。そして、あの事実の中で、天災という一般的な大問題と、僕個人の時間とが膠着し、そこに手に負えないような「個人史」が出現したのではなかっただろうか。また、今の陸前高田に出現している風景とは、歴史以前の時間、つまり「先史＝自然史」と呼ばれるような時間が、目の前の時代一切を流し去った結果ではなかっただろうか。

いまこうして、津波以前にあった町や暮らしにかんして、頭に思い浮かぶことを書き連ねようとすれば、それは僕個人の記憶を超えて、母の生まれた昭和初期、あるいは明治といった過去、つまり僕の知らない、日本の近代に思いを

及ぼすことになる(それを思い起こさせてくれる物や空間は、すべて消えてしまったけれど)。また、千年に一度の大津波、などと言われると、記録すら残っていないような中世や古代をぼんやりと想像せざるを得ない。丘の上から川や建物の消えた平地や山々を眺めれば、数千、数万年単位の自然史という、気の遠くなるほど長大な、人の歴史を超えた時間を思わざるを得なくなる。

しかも、実際に見てはいないが、この陸前高田と同じような目に遭った町が、東北の太平洋沿岸三百キロ以上に亘って延々と続いているというのだから、僕と似たような境遇の人物も、ひょっとしたら数万、数十万といった単位で存在しているはずで、その数だけそれぞれの人生の時間や過去の記憶があって……。いや待て、2004年のスマトラ島沖地震津波の死者は、たしか二十二万人を超えていたとか聞か。あとは、もちろん福島原子力発電所の問題が今でも続いていて、その放射性物質が無害化するには……。十万年？と、そこまで想像すると、自分の中の時間や歴史の感覚は、すでに粉々になっていることに気が付く。」

時間のスパンはどんどん遡って遠い過去からこんどは無限の未来へ走り抜けて、再び自分自身に戻ってくる。

「大津波によって、僕は自分が、なんだか以前よりも複雑な人間になったと感じている、複雑といっても、別に良いこと、というわけではない。むしろ良いこと、悪いことと簡単に言い当てることができないような事象が、自分の目の前に大量に出現し、それに手をこまねいたり考え込んだりしているうちに、世間で交わされている単純な物言いのほとんどが、紋切り型の欺瞞や無駄としか聞こえなくなってしまった、そのような、気むずかしい男になってしまったということだ。

傍から見たら「気むずかしい男」にしか見えないだろうけれど、じつは僕を感じる欺瞞や無駄とは、僕自身の思考や行動も含めて反省的に感じとられるものであって、その点で常に「本当にこれでいいのか?」と、僕に自問を強いてくるような性質のものだ。それに対して自分の心は「わからない」と即答する場合はほとんどであり、その後はたいがい、押し黙ってうつむくことになる。

「わからない。わからないけど……」そんな思いでここ三年半、故郷、陸前高田に通っていた。大津波という大きな断絶の後でも、時は容赦なく流れ、変化する土地の眺めは、過去の風景の記憶の上に分け隔てなく積み重なってゆく。大津波の直後は、目にするものがあんまりだったせいか、見たはずのものをよく覚えていなかったりするが、その時なんとか撮影した写真は、被災物がすべて片づけられてしまった今、大事な物事を思い出すための縁にも見えたりし、むごたらしい建物の写真に対してさえ、思わず「なつかしい」とつぶやきそうになる。

こんな風景写真を撮るよりは、仮設住宅に住む子供やお年寄りの笑顔によって、明るい未来を暗示することの方が、ポリティカルにはコレクトかもしれない、と思うこともある。でもあいにく僕は、ものごとをそのように行う習慣が生まれつき備わっていなかった。

2015年2月9日 東京 畠山直哉

現在の今泉に立ってみるとほとんど何も無い。今後もそこに家が建って町が蘇ることはない。「復興」とか「復旧」という言葉はここではふさわしくない。畠山の文章から、われわれが受け取るものを再度考えてみると、2つのことがわかる。

ひとつは、われわれは被災地で直接の手ひどい被害を被った方たちを「被災者」と考えてし

まうが、その中には津波に流されて命を奪われた死者、および生き残ってその後の生を生きようとして、さまざまな困難に直面した人々の他に、同じ被災地にいた人々にも比較的軽い被害で切り抜けた人もある。その線引きをするのは例えば、住宅の全壊・半壊・床下浸水などの区分は表面的なものであって、共に地域に暮らしていた社会関係は、物的な被害だけで測れないということ。

震災から2年、3年という時間の経過は、「復興」の名のもとに大規模な防潮堤や高台造成などの土木工事で回復できるものと、そうでないものを次第に明らかにしつつある。それは個々の人々の過去から現在、そして未来にいたる記憶のリフレクシヴな捉え返しを必要としている。政府や行政の考えた「復興」はとりあえず3年、そして長引いて5年くらいを考えて予算を投じていたから、6年半経過した現在では、福島原発の処理を別にすれば、もう終息段階に至っているともいえる。しかし、地域社会と産業の衰退と高齢化の中で、そこに多くの若い人が戻ってくる可能性は少ない。

もうひとつ気がつくのは、この畠山のようにかつてここを出て、「失われた故郷」として深い思いを抱きつつ生きている人は、直接の「被災者」よりも数多いということだ。父母祖母が生きていた家や土地が消えても、それを何らかの形で引き継いで、さらに長い時間の記憶の中で、ますます意味をもってくるような何か、それを抱えて生きている多数の「出郷者」の視線を、われわれはあまり真剣に考えていなかったのではないか。

おわりに

東日本大震災のような空前の大災害も、もはや歴史のひとつとして過去の語りになってゆくののだとしても、あの震災直後の状況の中で、わ

れわれが考えたことは、一過性の衝撃で終わるはずがないと思う。

最後に『3・11と私』の106人の執筆者の中で、ある意味ではいちばん傍観者的な感想を述べ、またある意味では自分の中の記憶を探って、被災者とつながる何かを探した文章を掲げたい。自分に何かできることはあるだろうか？あの時に多くの人が思っていた。しかし、できることは限られていて、結局自分には何もできない、というのは何とも情けないが、6年経ってみると、この文章から響いてくるものはあるのである。

「このたびの東北の大災害で、もっとも意外だったのは、これで日本という国の進路が変わるだろうとか、幕末以来の国難で日本は立ち直るのが難しいだろうといった言説が、メディアに溢れたことである。これは私が鈍感なのだといえはそれまでだが、その自分の鈍感について、この際思いを新たにしないわけにはいかなかった。

自分には一種の無感動が身についているのではないかとも思った。だとすれば、それは少年の日、敗戦後異郷で苛酷な生活を嘗め、焼け野原の日本に無一物で帰国した経験のせいには違いない。

姉と二人で最後の引揚船に乗る前、私は発熱して、当時間借りしていた友人の家の二階にひとり寝ていた。父と母は先に帰国していたし、大連にはもう残っている日本人はほとんどいなかった。窓から隣のビルの壁が見えた。陽はすでにかげって、壁は冷たい灰色である。これが終末の風景なのと思った。ちょうどエレングの『トラストDE』を読んだばかりで、主人公が飛行機で廃墟と化したヨーロッパに降り立った情景が思い合わされた。私は16歳だった。

でも、それは病気で心が弱っていたからで、石炭がなくてストーブも焚けない氷点下の生活

を送りながら、ひとつもつらいと感じた記憶はない。大日本帝国が減んで、心はうきうきしていた。

熊本へ引き揚げてくると、街中には焼跡がいたるところに残っていたが、人々は活気に溢れていた。両親は頼りにしていた親戚が焼け出され、お寺に寄寓していたので、そこに転がり込んでいた。そこに姉と私がさらに転りこんで、六畳一間に七人で暮した。あとで姉の勤め先の職員寮へ移ったが、それはバラック兵舎の内部をベニヤ板で仕切った一間きりで、戦時中焼夷弾がひっかからぬように天井板はとりはずされていた。隣とは話が筒抜けである。水道はなく、数十メートル離れたところにある蛇口までバケツで水を汲みに行った。そういうところに、私たちは昭和三五年、つまり戦後一五年になるまで暮した。不便だともつらいとも思わなかった。あとでつれあいになる人が遊びに来て、こんなところに住んでると恥じる思いはなかった。後年母は、あの職員寮のころが一番楽しかったと述懐した。

私は何が言いたいのだろうか。人間が文明の進歩、具体的にいえば経済の成長や科学技術の発展によって、安全で便利で快適な暮らしができるようになったのはよいことである。政府や自治体が災難や困窮に見舞われた住民に対して、ひと昔よりずっと保護の責任を果たそうとしているのも、同様によいことである。だが、経済成長には当然限度があるべきだし、科学は夢物語ではなく、人間に実現もしくは制御不能なことを明らかにするものであるはずだ。

いや、そんなことよりも、人間がこの地球上で生存するのは、災害や疫病とつねに共存することを意味するのであって、そういうものを排除した絶対安全な人工カプセルなど不可能だし、万一可能だとしても、そんなカプセルの中で生存するのは、人間が人間でなくなることな

のだという厳然たる事実を、この際思い出すことが必要なのだ。だからパスカルは人間はかよわい葦だと言った。かよわい葦だとしたら、一陣の風にも折れるだろう。だがその葦は地球の生み出すあらゆるゆたかさの可能性を甘受できるのだ。人間の生が稔りあるものだとすれば、いつ悲惨に見舞われても不思議ではない生存条件と引き換えにそうであるのだ。

人間が安全・便利・快適な生活を求めるのは当然である。物質的幸福を求めずに精神的幸福を求めよなどとは、生活の何たるかを知らぬ者の言うことである。上手にいれられた一杯の上等な紅茶は、それがそのまま精神的な幸福であるからだ。ただ、私たちに必要なのは、安全で心地よい生活など、自然の災害や人間自身が作り出す災禍によって、いつ失われてもこれまた当然だという常識なのだ。人間はもともとそんなに脆弱なものではない。カプセルめいた人工的文化環境に保護されなくても、よろこびをもって生きてゆける生きものなのだ。人工の災禍という点でも、人間の知恵でそれから完全に免れるという訳にはいかぬと私は思っている。人間はそれほどかしこい生きものではない。争いつつ非命に倒れる。それでもつねに希望はあるのだと思っている。

このたびの災害で、日本という国の進路は見直されるのだという。よきに計らってくれ。私には日本とか日本人という発想はない。それは指導者の理念で、私は指導者ではない。私にはただ身の廻りの世の中と、そこで生きる人々があるばかりだ。その世の中が一種のクライマックス(極相)に達していて、転換が望まれるとは、むしろ私も感じている。だがそれは、いわゆる3・11がやって来ようと来まいと、そうだったのである。しかしこの転換は容易な課題ではない。それについては今のところ、人びとの合意も難しい。残余はすべて当座の政策の問題であ

る。災害からの復興の仕方もそうである。口を出そうとも思わないし、またその能力もない。」渡辺京二「かよわき葦」『3・11と私 東日本大震災で考えたこと』pp.29-32.

【註】

- (1) 藤原書店編集部編『3・11と私 東日本大震災で考えたこと』2012.8
- (2) 以下特に書名を記さない場合は、すべて藤原書店編集部編『3・11と私 東日本大震災で考えたこと』2012.8の引用であり、ページ数のみ記す。
- (3) 竹中平蔵・船橋洋一編著『日本大災害の教訓 複合危機とリスク管理』東洋経済新報社、2011.
- (4) サンク・コスト：既存の制度や体制を壊す必要が生じたとき、破壊に伴うコストのこと。例えば、新しいエコ・タウンを建設するには既存の町を取り壊さなければならない。そのための費用(埋没費用・除却損など)をサンク・コストと呼び、大震災で町が根こそぎ失われるような場合、サンク・コストがゼロになるので、大胆な計画の実施ができる。
- (5) 田中重好・船橋晴敏・正村俊之の編著になる『東日本大震災と社会学』ミネルヴァ書房、2013.3.
- (6) 畠山直哉『陸前高田2011-2014』河出書房新社、2015.

【参考文献】

- 藤原書店編集部編『3・11と私 東日本大震災で考えたこと』藤原書店2012.8.
- 田中重好・船橋晴敏・正村俊之の編著になる『東日本大震災と社会学』ミネルヴァ書房、2013.3.
- 社会福祉法人岩手県社会福祉協議会「平成28年度東日本大震災被災者実態調査研究報告書」2017.3.
- 高橋恒夫・(株)ディーワーク「よみがえる陸前高田市の今泉集落一流出前の調査と復興活動の資料集一」2015.7.
- 畠山直哉『気仙川』河出書房新社、1012.
- 畠山直哉『陸前高田2011-2014』河出書房新社、2015.5.